
果てに繋ぐ

芙蓉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
果てに繋ぐ

【Nコード】
N3796V

【作者名】
芙蓉

【あらすじ】
ひとつの終焉の先にある、ひとつの誕生。

1：卒業前夜（前書き）

剣あり魔法あり冒険ありの王道、けれどもちよつと大人め（になる
といいな！）で切ないファンタジーを目指して執筆していきます。
更新はすごく遅く、そしてまだまだ未熟者の筆ですが、よろし
ければご覧ください。

願わくば、この小説が読者様のひとときの憩いとなりますよう。

1：卒業前夜

夜の風が好きだ。冴え渡った風を浴びていると、その日一日の疲労や悩みがするりと抜け出ていくような心地がする。いつもとは違う夜だったけれども、いつものようにリーフェはノツノトーカ湖のほとりに赴いていた。もちろん、夜風を浴びるために。それでも今日はやっぱり特別な夜であって、この時間帯にはないはずの人の姿を見つけた。先客だ。

凪いだ湖面に向かってひとり佇む背中には、見覚えがあった。いや、見覚えどころか。ここ二、三年で急にがっしりしてきたその背中では、形がそのまま網膜に焼きついていてのではと思うほど、毎日見慣れたものだった。意地悪な考えがリーフェの頭を過ぎる。驚かせてやるう。彼女は用心深く足音を忍ばせて近づいた。

三步目をそつと地面に下ろした瞬間だった。ふつと空気が緊張する。術の前兆だ。リーフェも身を固くする。

一呼吸の後、闇に染まった湖面を覆うようにまばゆい炎が溢れた。それは火の粉を散らしながらゆらめき、舞い、渦を作って天高く駆け上った。月を焼くような場所にまで届いて、夜闇を橙に照らす。リーフェはしばし、その光景に目を奪われた。

その後徐々に細くなった火柱は、最後に風にさらわれた。湖畔に夜が戻る。背中がようやく振り返って、見えた顔が笑んだ。

「卒業試験前夜にこんなところに来る物好きは、俺くらいだと思ってたけど」

リーフェもくすりと応じ、隣まで歩む。

「さっきの派手な炎創操術を見た人が、いっぱい集まってくるかも」「もう遅いし、皆寝てるだろ。特に明日、一世一代の大勝負を控えている奴らは」

「その一世一代の大勝負を明日に控えているはずのシイラは、こんな時間にこんな場所にいいいの？」

「リーフェこそ」

「私はいいの」

ほんとうは眠れなかったのだと言ったら、シイラは笑うだろうか。横目で盗み見た彼の顔は至って落ち着いているように見えて、リーフェは笑みを足すのを忘れた。おそらく気付いて、シイラも笑みを引っ込める。まじまじとリーフェを見つめた後、しごく意外そうな表情をして、言った。

「へー。リーフェでも緊張したりするんだな」

「してないわ！」

どうして凶星をつかれたときほど、正直な反応をしてしまうのだろう。これでは後からどれだけ否定しようと無駄だ。リーフェはふいと視線を逸らして、俯いた。無駄だとは分かっているけど、焦った顔や緊張した顔は隠しておきたかった。

「昔っから嘘が下手だよな、リーフェは」

直接表情を見なくとも、シイラがどんな顔をしているのかは分かる。呆れ半分、からかい半分の笑みを浮かべているに違いない。いっそう顔を合わせにくくなった。

「そんな心配しなくて、おまえなら大丈夫だと思うけど」

てつきりからかいの言葉が続くと思っていたリーフェは、思わずシイラのほうへ顔を戻していた。気を遣ってくれたことはすぐに分かったが、彼女はまだ素直にはなれなかった。意地悪な言葉が飛び出る。

「首席卒業確定の人が羨ましいよ」

聞いて、シイラは苦笑を零した。肩も竦める。

「前から思ってたんだけど、リーフェは俺を買い被りすぎだ」

湖面に目を落とすシイラの目が少し心細げに見えたのは、リーフェ自身の心から生まれた錯覚かもしれないが、彼も本当は不安なのかもしれない。

「そんなことない。十年間も傍で見てきた私が言っただもの、間違いないわ」

十六歳のリーフェにとって、十年は人生の半分以上を占める長い時間だ。その長い間、傍でずっとシイラの優秀さを目の当たりにしてきた。何でも出来てしまう彼を、いくど羨ましがったかしのれない。「私がここで術の失敗をして林を火事にしたとき、鎮火してくれたのはシイラでしょ？」

「ああ、そんなこともあったな。懐かしい。後で教導師長にひどく怒られたっけな」

「それでも教導師長はシイラに感嘆してた。ルゼが湖凍らしたときも、溶かしたのはシイラだったよね。それにさっきの炎創操術もすごかった。成績だってこれ以上ないほど優秀だし、ああ、そうだ。ルゼがね、首席をネタにした賭けやってるらしいの。知ってる？シイラに集まりすぎて賭けにならないって言ってたわ」

いつの間にか必死に喋っていて、息が苦しい。ほんとうに、羨ましかった。嫉妬だつてしたが、一番に、目標だった。リーフェは息をつきながらシイラを見た。笑っている。

「首席で賭けなんかすんなよな」

「私もね、賭けたの。負けたら五百レルよ。お願いだから首席になつてね」

「馬鹿」とまたも笑ったシイラに、もう心細さは微塵も見えなかった。勝手な話だが、シイラにはずっと自信を持っていたほしいと、リーフェは思う。

「じゃあさ」

ふと真面目な顔になって、シイラが言った。

「俺はリーフェにしようかな」

「なにが？」

聞くと、シイラはにっと歯を見せた。

「首席当ての賭け」

「は？」

リーフェの上げた素っ頓狂な声は、夜の静寂を割って、よく響いた。あまりにも突拍子もない話で、しばらく頭の中が真っ白になる。

「何言ってるの？」

結局冗談だと結論づけて笑ったリーフェだったが、シイラが思った異常に真剣そうだったのですぐに引っ込める。

「本気？」

「本気」

短く答えて、シイラは空を仰いだ。わずかに欠けた月が、無言で空に浮かんでいる。

「ほんとうに、何言ってるの？」

先ほどと同じ言葉を、しかし違う意味でリーフェは使った。よく見て上の下の成績のリーフェを首席の賭けの対象にするなど、どうかしている。それこそ馬鹿だ。

「直感だよ、直感。結構当たるんだぜ？」

「今回のが当たる確率、天地がひっくり返る確率よりも低いと思うわ」

あきれて言う、シイラはよく分からない笑みをした。苦味の入った、どこか悔しそうで寂しげな笑み。こんな笑い方、初めて見た。すぐに元通りになってしまったけれど。

「賭けるのは一レルにしとくけど」

「ちよつと本気で心配した私が馬鹿でした」

二人で一緒に笑いながらも、リーフェは少し切なさを感じていた。これはきつと、卒業を明日に控えているせいだ。

「暖かくなつたな」

思い出したように、シイラが言った。その言葉を待っていたように、風が吹く。やはり冴えていたが、それでも冷え切ってはいなかった。

「そうだね」

暖かくなった。もう雪は降らないだろう。次に降るときには、リーフェたちの大半が、この地を去っている。そう思うと無性に寂しい。

「卒業だね」

「だな」

卒業は明日だ。明日から、新しい何かが始まる。始まりの扉はきらきらまばゆく、手を伸ばしたいような、目を背けたいような、相反する二つの気持ちがリーフェの中で拮抗していた。

そういう特別な日をすぐ傍に控えていても、湖畔の夜は穏やかで、それぞれの部屋へ戻っていったリーフェとシイラの背の後ろで、いつもと同じように更けていった。

2：筆記試験（前書き）

早速お気に入り登録してくださっている方がいらっしやっただのに、感動して泣きそうになりました。死ぬほど嬉しかったので、がんばって早めに上げてみました。（これでもがんばったんです！）小説家になろうさん、いいですね。別サイトで書いてるものもここに引っ張ってこようかなあ。

いらしてくださいありがとうございます！ 第二話、お楽しみください。

2：筆記試験

『問十五。第三次混沌期において活躍した若き英雄たちについて答えよ』

問題に目を通して、思わず、リーフェはほくそ笑んだ。史学はあまり得意ではなかったが、この部分だけは細部までしっかりと覚えている。リーフェとそう年の変わらない者たちが活躍した出来事であったから、自然と興味が湧いて、熱心に講義を聴いていたのだ。羽ペンを握り締めて、意気揚々と解答用紙に向かう。

『ラテアノ暦三七二年、死の神ベデルアク三度目の覚醒により第三次混沌期が幕を開けた。ベデルアクはついにレヴィアナ大陸の南西部から地上へ侵攻、ハーチエルスト地方がその手に落ちる。それを足がかりにして徐々に勢力を広めつつあったベデルアクだったが、その前に立ち塞がったのが若き英雄、奇跡子と呼ばれた者たちである。』

奇跡子は、六人の成人したばかりの者たちだった。彼らは死の神に立ち向かい、終命の扉をもって至悪を封じたが、代償に命を落としたと伝えられている』

彼らの偉業と悲しい結末は、リーフェの心をさらに強く打ったために、暗記は完璧、おかげで答案も完璧だ。ペンを置いて、ふっと息をつく。六人の英雄たちは当時の大陸だけではなく、現代に生きるリーフェの卒業をも救ってくれたのだ。感謝しながら、リーフェは答案を見直した。筆記試験はまずまずといったところか。

しかし、問題はここからなのである。卒業試験は筆記試験と実技試験、そして術試験からなる。持っている知識、知力が素直に試される筆記試験とは違って、実技試験にはある程度の運と度胸が必要

だ。三つの試験で好成績を残した者から卒業とその後の勤め先が決まる。かなりのプレッシャーの中、後ろ二つの試験を乗り切らなくてはならない。

そこまで、という号令を合図に羽ペンが落ちる音があちこちから聞こえてきた。答案を裏返して退席する。講義室を後にしながら、リーフェは見知った顔を搜した。隅にルゼの姿を見つける。

「筆記、どうだった？」

近寄って声をかけると、ルゼはニヤリと笑った。

「あたしは試験なんてどーでもいいもの」

ふざけて答えながら、彼女は思いつき伸びをする。王城御用達の革製品を作る家の一人娘のルゼは、その仕事を継ぐことが既に決まっている。卒業さえできればいいのだ。気楽なもの。羨ましい。賭けの主催など、そうでもなければやってられないだろうが。

「それよりさ、やつぱすこいよ」

「なにが？」

ルゼは片目をつぶった。

「あんたの許婚よ」

「ちよつと！」

大声を出したリーフェを、ルゼはけらけらと笑った。昔からずっとこの手の話でからかわれるのだが、いくつになってもまったく免疫がつかない。

「八十人くらい参加してるんだけどさ、七十人はシイラに賭けてるよ。これじゃ、本当賭けになんかならないね。ま、無理もないけどさ。あんだけズバ抜けてりゃ、そりゃあねえ」

やはりと言うべきか、シイラが首席になるだろうことは、誰の目から見ても明らかなのだろう。リーフェは自分のことのように誇らしかつたが、少しばかり寂しくもあった。首席になれば、ノットノール代表として成人の儀の披露会の代表として王城に呼ばれ、そのままそこで働くことがほぼ決まる。

「羨ましいねえ。玉の輿決定か」

「ルゼ！」

さらに笑うルゼを、リーフェは精一杯に睨みつけた。が、ルゼはどこ吹く風、笑い続けている。

「ほーらほーら、武術試験行かなくていいのー？ 遅れるよー？ あんな卒業だけじゃなくて就職もかかてるんでしょー？」

ルゼは余裕たっぷりリーフェをからかい続ける。試験のことを考えなくてはならなかったのに、彼女のせいですっかり吹き飛んでしまっていた。遅刻すれば落第決定、リーフェは慌てて試験用の棒を取りに走った。もう一度試験に集中しようとして、いくぶん緊張が緩んでいたのに気付く。素直に感謝はできないが、ルゼのおかげだった。

3：術試験－1（前書き）

遅くなつてしまいました。ごめんなさい。

この作品を読んでくださっている全ての方に心からの感謝を。

3：術試験 - 1

武術試験の結果は惨憺たるものだった。もともと並以下の實力でしかないのに、潔く諦めることにする。次の術試験の会場へとリーフェは急いだ。外が暗くなり始めている。術試験ももう半分くらいは終わっているのだろう。ある程度の数ごとに分かれて行う筆記・武術試験とは違って、術試験は全員が同じ場所で同じ試験官のもと行われる。アリーナで実施されるために、他生徒やその親なども見に来る。その上術に最も影響するのは精神力と来れば、誰だって緊張する。

リーフェ自身の順番は終わりから七番目だ。焦る必要はないのだが、五十三番目にシイラが受験する。そろそろのはずだった。昨日の晩、不安げに見えたのが気に掛かっていた。シイラのことだから、たぶん大丈夫だろうけれども。

アリーナに入って、階段を駆け上がり、技場を見下ろした。ちょうどルゼが試験を受けている。シイラは次の次だ。よかった、ルゼの試験にも間に合った。切れた息を整えるため、リーフェは深く息を吸った。

「リーフェちゃん？」

騒がしいアリーナの中で呼ぶ声は、誰のものか判断しかねた。後ろを見ると、こちらへ向かって手を振る者がある。栗色の髪でようやく分かった。レーラおばさん。シイラの母親だ。

「こんにちは。お久しぶりね」

「お久しぶりです」

一年前の休暇に里帰りしたとき以来だったが、優しく朗らかな微笑みは少しも変わっていない。シイラの笑い方とよく似ていると思う。隣に腰かけた。

「リーフェちゃんはいっ？」

「最後の方。シイラはもうすぐですね」

「そうなの？ あの子、ちつとも教えてくれなくて。伝書も来なくていいの一点張りよ」

ふふと笑うレーラおばさんの顔は、それでも緊張していた。息子の一世一代の大勝負が迫っているのだ、当たり前だろう。一緒に笑いながら、リーフェも緊張していた。

「リーフェちゃんのお父さんとお母さんも来ているはずよ。お仕事に忙しいみたいで、ギリギリになるって仰っていたけど」

「そうなんですか？」

驚く。が、少し安らいだ。アリーナは広い、姿はたやすく見つけれないだろうが、いてくれると分かっただけで落ち着けた。

ルゼはなかなか健闘した。出された三つの課題のうち、二つを成功させたのだ。最初の本を成長させる術を、成長させすぎて枯らしてしまった以外は完璧だった。やはり変に気負わないほうがいいのだろう。続くレンドンという男子生徒は、緊張しているのが見て取れて、案の定大失敗した。術の腕はなかなかだったはずで、肩を落として帰っていく。自分もあなるかもしれないと思うと、背が冷えた。

「ああ……」

隣でレーラおばさんがため息をついた。吐いた息が震えている。技場にシイラが現れたのだ。普段はほとんど着ることのない正装用の制服を着こんで、沈みかけた夕日を背に堂々と立つシイラは、別人のように大人っぽく見えた。期待の大本命のご登場に、アリーナが一瞬静まる。待っていたように、シイラが深呼吸をしたのが分かった。

「名を」

「シイラ・ニツヒンケリ。五十三番です」

試験官が頷いて、手元の紙を見た。あれに試験の内容が記載されている。ついでに筆記と武術試験の結果も書いてあるはずだ。

「では、第一の課題です。ここへノツノトーカ湖の水を運んでくだ

さい」

観客が一斉にどよめいた。難しい課題だ。先ほどのルゼのときは違って、どの術をどのように使えばいいか分からない。少なくともひとつの術だけでは不可能だろう。何より、近いとはいえ、アリーナとノツノトーカ湖の間にはそれなりの距離がある。遠隔操作能力に著しく劣るリーフェには、到底無理な課題だった。

シイラはわずかな逡巡の後、俯いた。遠くてよく見えないが、おそらく術の詠唱に入ったのだろう。しばらく経つと、顔を揚げて右腕を胸の前まで持ち上げた。手のひらを上に向けて空を見る。その瞬間、湖のある方向から、何かが天に向かって伸びた。その何かは途中で向きを変えると、半曲線を描きながらアリーナの方へ飛んでくる。すごい勢いだ。

「あ、やつべ」

遠く離れているはずのシイラの焦った声が、リーフェの耳にはよく届いた。ちよつとうるたえて、シイラがその場から飛び退る。ちよつとさっきまでシイラのいた場所に、何かが墜落するように落ちた。ばしゃんという音でそれが何か理解する。水だ。おそらく、ノツノトーカ湖の。

「すごい……」

アリーナから湖まで繋がった水のアーチを見て、誰もがそう呟いたことだろう。リーフェも知らぬうちに口がそう動いていた。レーラおばさんも息を呑んで、そのまま呼吸を忘れてしまったようだ。

「よろしい」

その声がかかるまでに、しばらくの時間を要したことから、試験官も我を忘れて見入っていたに違いない。シイラは肩を竦めた。苦笑いしているのだろう。指が鳴ったのを合図に、水が湖へ帰っていく。夕日を浴びて輝く水の橋は、とても幻想的な光景だった。

「今のは？」

「はい？」

「どの術を使ったのですか」

試験官が試験進行以外の目的で口を利くなんて、少なくともリーフェには前代未聞だった。ヘンチエル教導師長も、興味と好奇心を抑え切れなかったらしい。

「えーと、あそこで何回も術使ったことあるんで、自分の術痕を探して位置指定したあと、転移術の要領で力を繋いで、召喚術の応用で水をひきつけたんですが」

「ふむ」

「重力のこと考えるのを忘れていて、そつと下ろすつもりがこういうことに」

水が激しく落ちたせいでへこんだ地面を指して、シイラはまた肩を竦めた。リーフェも小さく笑う。レーラおさんの笑い声も聞こえてきた。転移術と召喚術の組み合わせ、それも遠隔操作でやってのけるすごい腕なのに、ちょっと詰めが甘いところがシイラらしい。「ふうむ、なるほど」

完全にいつもの口調に戻った試験官のヘンチエル教導師長に、後ろからリーヴェン副教導師長がひそひそ何かを言う。はっとしたように顎から右手を離すと、教導師長は咳払いして試験を進めた。忍び笑いがアリーナに広がる。

「よろしい。それでは第二の課題です。この岩をできるだけ細かく砕きなさい」

試験官に戻った教導師長が手を叩くと、宙から大きな岩が出現した。優にシイラの身長三つ分はある。シイラはまずそれを拳で二、三度軽く叩いた。かなり硬そうだ。

確認を終えると、シイラはすぐに詠唱に入った。長い詠唱だ。シイラが一度目に顔を上げたとき、岩の周囲が半透明の膜で覆われた。岩が完全にその中に綺麗に収まっているのを確認し、二度目の詠唱。今度はさほど長くなかった。瞬間、すさまじい爆音が轟いた。岩が膜の中で粉々に砕けていく。爆音は何度も何度も繰り返され、岩が砂に変わった頃、ようやく止んだ。

「よろしい」

教導師長が満足げに頷いた。今の術の仕組みは、リーフェにも理解できた。遮断反射の鏡壁を膜状に張り巡らせて岩を囲み、後に用いる爆破術によって岩の破片が飛び散るのを防ぐと同時に、大量の力を使う高難度術の詠唱を一度きりにする。理屈は分かるが、実行するには恐ろしい難度だ。リーフェは、爆破術ひとつ満足に使えない。

「では、最後に炎創操術を」

全生徒共通の最終課題を言い渡されたシイラは、幾分か安堵したようだ。これまでの力はどこか張り詰めた空気を伴っていたが、最後に集められていく力には穏やかさがあった。昨夜リーフェが見た通りの動きをした炎は、最後に消え入るとき、ひらひら花びらのように舞い散った。そうしてシイラの試験は終わり、アリーナには拍手が溢れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3796v/>

果てに繋ぐ

2011年8月13日03時24分発行